新宿警察

夜だけの恋

藤原審爾

角川文庫

夜だけの恋

藤原審爾

角川文庫 4128

昭和五十三年九月三十日　初版発行
昭和五十六年五月三十日　七版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷　製本所——文宝堂製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-125703-0946(1)

夜だけの恋

藤原審爾

角川文庫 4128

冬の夜空にそびえたつ巨大なビルとビルとの間の、その狭(せま)い通路の入口を、街灯の白っぽい淡い光が寒々しく照らしている。左側のビルのほうの地面に出来た水溜りが凍(い)てついている。細長い水溜りの、その少し奥から通路は夜の闇(やみ)にのまれている。

その暗くしんしんと冷えこむ通路の闇の中で、低い若い男のせつなげな声がした。

「今日も駄目なのか」

若い女の小さい声がそれへ答えた。

「かんにんしてね、きよしちゃん、どうしても休ませてくれないのよ、一時間だけひまをもらってきたの」

いちずな愛と悩みが、その声にこもっていた。

「ずっと今日を、おれ、待ってたンだ」

「あたしだって、そうなのよ。もう心がかさかさで、ひびわれちゃうみたいよ。うんと優(やさ)しくしてもらいたくて」

若い女の子の声は、泣きだしそうになった。

「好きだよ、けいちゃん」

「愛してるわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

強くはげしく抱きしめられて、若い女の唇の間から、ながい熱い愛の声がもれた。

「ああ」

若い男は、抱きしめた軀と触れた唇と頬と髪で、たちまち燃えあがり、若くうわずった声になった。

「こんな生活は、これ以上、いやだよ、おれ。金だ、金があればいいんだ、きっとおれは、金をつくるよ、つくってやるンだ」

「あなたなら、なんだって出来るわ。でも、馬鹿なことをしちゃいやよ、あたしがいるってこと、忘れちゃいや」

「ああ、ずっとこうしていたいなあ」

「あたしだっていろいろ考えてるわ。一年か二年の辛抱よ」

「そんなに、おれ、待てないよ」

「だってそのくらいの辛抱はしなきゃあ。それからあとは、ずっと一緒にいられるンだもん」

「今日、どうしても、駄目かい」

「抜けだしてくるのが、やっとだったのよ。もう何時かしら?」

「ねえ、こんなだよ、ほら」

「我慢出来ないの」

「ああ」

「ここでいい？　寒かぁない？」
「平気だよ」
「ほら、手つめたいでしょ」
「平気だよ」
「燃えてるみたい、気持ちがいいわ」
男はするどい呻き声をあげた。
「こんなじゃもの足りないでしょ」
「いいんだ、とてもいいんだ」
「うれしいわ」
「ああ」
「もっとよくなってよ」
「ああ、汚しちゃうよ」
「待って」
「駄目だよ、そんなの」
「大丈夫よ、いっていいわよ」
それから若い男のあえぎうめく声だけになった。
それから若い男は、ほどなく歓喜の呻き声をあげはじめた。

ビルの谷間のつむじ風が、その通路をゆっくり吹き抜けていった。
「ああ、やっと落ち着いたよ、いらいらしていたンだ」
「よかったわ」
「好きだよ、けいちゃん」
「愛してるわ」
「今度の日曜まで、もう会えないよな」
「電話するわ」
「待ってるよ」
「そろそろ帰ンなきゃね」
「よし、帰ろう」
それで若い男と女は、足音をたて、通路のずっと奥から表の広い通路の街灯の明かりの中へ、よりそって、姿をあらわした。
若い男は、二十二、三の背の高い、黒いジャンパー姿で、どことなく疲れたちんぴらだった。
若い女は、濃い化粧をした、安ギャバレーの女で、ドレスの上にコートを羽織っていた。
闇の中の二人と、明かりの中の二人とは、まるで別の人間のようだった。
それが、いかにも、大都会とその下積みの若者たちの感じを物語っていた。

その中年の小柄な男は、もう一時間ちかく前から、その閑かなビル街へ、千鳥足でやってきていた。

茶色のハーフコートをきたその男は、淡い街灯に照らされた路わきに並んだ車のわきを、ふらふらビルや駐車している車にぶつかりそうになりながら、淀橋のほうへ歩いていった。彼はふらつくわりに、ビルにも、停まった空き車にもぶつかったりしなかった。それに不思議に足音がしなかった。そして彼は一台一台、窓から車の中をのぞきこんだ。この頃、車の中での窮屈なセックスが、そうめずらしいことではなくなっている。酔っぱらった彼は、それを見学しにやってきたようだった。角のところまで行くと、路をわたり、反対側の駐車している車をのぞきながら、西口広場のほうへ向かっていった。生憎日曜日なので、車の数は少なく、そのうえ、どの車にもただの一人も乗っていなかった。

しかし彼は、少しも失望しなかった。また路をわたり、たったいまやったとおりのことを繰り返しはじめた。

しかし彼のやりかたは、ほんの少し前の時より違っていた。彼は車の中をのぞくかわりに、三角窓とドアーが開くかどうかを、手ばやく調べていた。

彼はふらふら酔っぱらったように歩いていたが、まったく酒の気など一滴も入っていなかった。むしろいっぱい寒さしのぎにひっかけたいくらいだった。そしてむろん彼は、ノゾキをしにきたのではなく、人が車にのこっているかどうかを、さっき調べてまわったのだった。もうかなり前

のことだが、この仕事をはじめたばかりの彼は、自分の仕事に夢中で、ついうしろの車で、中年の男たちが抱き合っていることに気がつかなかった。三角窓をぶっこわしたところで、大声をあげて騒がれ、もう少しのことで、とっつかまるところだった。しかしいまは、そんなへまな真似をしたりはしない。

彼は仲間の中でも腕のいいほうになっている。

彼の仲間は、中古車を東南アジアへ輸出しており、彼の仕事はそのための車をかっぱらうことだった。

そのうち彼はずっと奥のほうで、後部のドアーをロックしていない、馬鹿な持ち主をもったヒルマンをみつけた。二年目の車で、まだ一万キロほどしか走っていなかった。それに馬鹿な持ち主は、なかなか趣味がよくて、あまく品のよい香水の香が、車の中にこもっていた。

彼は車の修理工場を渡り歩いており、そういうことにかけては、まったくベテランだった。運転席で、エンジンをキーなしでかける仕事のため、手袋をぬぎ、掌に息を吐きかけて指先をあたためだした。

ちょうどその時、つい斜めむこうのビルの谷間から、若い男と女が出てきた。

やってきぁがったな

それをいますませたばかりの感じが、若い男にはありありと出ていた。女は赤いドレスをきた上に、安物の紺のコートをひっかけており、青カンだろうとなんだろうと、平気でやってのける

感じだった。

歩道に出たところで、二人は別れの接吻をし、それから左右に別れた。若い男は、淀橋のほうへ歩きだし、若い女のほうは駅のほうへと歩きだした。

若い女の軀には、はっきりそれの火照りがのこっており、足どりがにぶかった。それに腰のあたりが重くぐったりとしており、そこに満されない気配が、ありありと出ていた。ちょっとそそられたが、彼は、

「餓鬼じゃアな」

とつぶやいた。

彼はそれからいそいで仕事にかかった。

たちまちエンジンがかかった。

彼は汚れた手を拭くために、物入れをあけ、洗いたてのタオルと洋酒の小瓶をみつけた。ヘネシーだった。

一ト口のむと、酒の香のほかに、口紅の匂いがした。

いったい、どんな女なんだろう

彼はそういう時、たとえば女優のような美しい女を描いたり、旦那がいてバーを一軒もたせてもらい、豪勢なマンションに住んでいる女というふうなことも思わない。彼はそういう女とは縁もゆかりもない生活をしていたのであり、うかんでくるのは、蒲団の中での女のみだれかたとそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の味だけだった。

まったくなんのゆとりもない、それだけのものだったが、それゆえストレートで強くて、彼自身にはごく刺戟的な思いなのだった。彼はそれでまたもう一トロヘネシーをのんで、瓶を空にして、足もとへ転がした。そして彼は今夜の収穫の車を、ゆっくりすべり出させた。運転は堂に入ったものだった。

世の中には、そこに運命の神がいるといわざるを得ないようなことが、よくあるが、その時もそうだった。

彼が車を駅のほうへと走らせだすのとほとんど同時に、若い女は右側の歩道から左の歩道へと移りだした。彼女が働いているキャバレーはミラノ座のほうにありいくらか左側のほうが近いのだが、なにもそこで路を横切らなくてもよかったのだった。

その上、渡りきらぬうち、彼の車がゆっくり、彼女の前を通りすぎかけた。それで彼女が立ちどまると、車は通りすぎようとせず、彼女の前で停まり、車の中から窓があき、

「どこへ帰るンだ、のんなよ、送ってやるよ」

と彼がいった。

彼女は、それに答える必要はなかった。

ただもう彼女は、からだの火照りと愛を、独りじっと抱きしめていたいだけだった。

憤然と彼女は、彼に目もくれず、広い路の真中をいそいで歩きだした。むろん、彼はすぐにし

つこく追いすがってきた。
「そう気取ることねえだろ、姐ちゃん」
それへ答えず黙殺すると、今度は、
「暗がりで、なにやってたンダよ、おれにもやらせろよ」
彼はそこでげらげらと笑った。
彼女は瞬間、はじかれたように駆けだした。あわてて、彼がスピードをあげた。すると彼女は突然、身を翻えし、左の歩道へ逃げこもうとした。そのあたりからずっと駐車している車が続いており、その向こうへ逃げこめば男も諦めるにちがいない。
しかし実際は、彼はいま仕事中なのであり、それ以上そんなことをしてはいられなかったし、またする気もなかった。そういうはっきりしない悪ふざけが、一瞬、彼の手許を狂わせた。
あっと彼がブレーキをふんだ時には、かなりの手応えと俱に、若い女は路上へ転がっていた。
彼はこれ以上かかわりあうつもりはなかった。
それに、大した手応えではない気がした。
しかし路上の女は、死んだようにうつ伏せになったきりである。裾がめくれて深腿がみえ、その白さが彼の目に沁みた。
彼は欲望につられ、ふらふらと下り、若い女が死んでいるかどうかを調べに近づいていった。
女はまだ若くて二十歳くらいで、ひきしまった意外にいい顔立ちをしていた。

彼は、いまは気絶しているだけだが、このままほっておけば、凍え死ぬかもしれないなと、すばやく思った。そういう場合もなくはないが、車も通るし、パトロールもくるのだから、まずその危険はない。彼はただ女を車の中へ連れこむ口実をつくったにすぎなかった。

彼は自分のつくった口実に、忠実だった。すぐ女を抱きあげ、うしろのシートへ寝かせた。

もしかすると、気絶しているふりをしているのかもしれない。

念の為、彼は女の下ばきの下へ手を入れてみた。やはりほんとうに女は気絶しており、微動もしなかった。こんもりふくらんだ茂みの奥のそこは、べとべと冷たく濡(ぬ)れていた。

それが彼をたちまち欲望の虜(とりこ)にしてしまった。

彼は急いで運転席にもどり、車を走らせだした。

彼がそれをたのしむ間、彼をつつみかくしてくれる闇を求めて走りだした。

下辺(しもべ)かつは、ビルの清掃婦で、新宿西口の事務所へ六時までに出かけ、そこで仕事着にきかえてビル掃除の仕事に出かける。

その朝、下辺かつはいつものように、六時十分前に淀橋の家を出て、新道路の歩道を西口のほうへ急いでいた。暁方(あけがた)、目が覚めるほど冷(ひ)えこんできたが、急に寒さがやわらいだと思ったら、粉雪がちらつきだした。

ちょうどビル街のてまえの広通りの信号から三十メートルほどのところで、かつは、

おやっ
と思った。
こう寒くちゃア、オーバーがほしいと途々思って歩いていたものだから、それでオーバーのまぼろしをみたのかと、すぐ思った。
いくらなんだって、そんな馬鹿なことはない。
そんな年でもない。まだ四十をすぎたばかりである。
かつは、立ち止まり、それから十歩ばかりひきかえし、ガードレールのところから、下をのぞいてみた。
もと貯水場だったそこは、空の池のようになっている。
急な斜面には、冬枯れした雑草が生えており、その斜面の底のほうに、まぎれもなくオーバーがあった。
紺色の女生徒がきるようなオーバーが、投げ捨てられている。
どうしてこんなところにあるものが目に映ったのか、かつはわがことながら、ちょっと呆れた。
しかしものの三十秒も、かつは、呆れてはいられなかった。
紺のオーバーの向こうに、あかい服の女がうつぶせに転がっているのに気がついた。かつは、通りがかりの男をよびとめた。
「酔っぱらって、おっこちてるわ。助けてあげてよ」

近よってきた男は、強い近視の眼鏡をかけた青年で、まだ仄ぐらい底によこたわった女を、見つけることが出来なかった。

「あんた、そこよ、あんな美人が見えないの」

とかつは背中を叩いてやった、一つ。

若い男のあとからきた、労務者風の若者がすぐガードレールをまたぎ、急な斜面を半ばすべりながら下りていった。

底に近いゆるやかになった斜面に、うつぶせに転がった女へ、若者は、あと二、三間のところで、びくんと棒立ちになった。

それ以上近づく必要はなかった。

裾がめくれた女の横顔には、ひどくぶたれたような痣があり、目はかっとみひらかれたままだった。

若者は、斜面の上を振り仰いだ。

もう十人以上もの人間が、ガードレールの外に出て、彼のほうを見おろしていた。

なかには面白そうに、にこにこ笑っている者もみえた。

彼は思いきり大声をあげて叫んだ。

「死んでるぞう」

上の連中が一瞬どよめいた。

「一一〇番へ電話してくれよう」
彼は重ねて叫んだ。
それでもまだにこにこ笑っている連中がいた。

その時、根来は取調室で、竹内という若い愚連隊を、山辺がしめあげるのを、わきから見ていた。竹内は、御苑前のあたりから、四谷、新宿二丁目界隈で、このところ学生あたりへ睨みをきかせ、金品を捲きあげている、バイト学生あがりの男である。以前、バーテンをしている頃、コールガールの組織をつくり、ひと儲けしたが、その代りムショに叩きこまれ、二年ばかり臭い飯をくってきた。

ムショから出てきてからは、愚連隊のボスにおさまり、絶対自分では、なにひとつ直接手をつけなくなった。手下の連中に、自発的に仕事をさせ、それで得た金の何割かを収めさせている。

ムショにいる間中、法網をくぐり抜ける方法ばかりを考え、一度にプロになって戻ってきたのだが、五年ぶりに彼は、とんだヘマをやってしまったのだった。

麻薬密輸の大物の林仁栄の子分で、神戸からきて彼の許で一泊した金森市郎という男が、今朝の明け方、突然押し込んできた二人連れの男に、拳銃で射殺されたのである。

山辺はしょっぴいてきた竹内を呶鳴りつけているが、容易に歯が立たない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com